

## 独思録：「タイガー・マスク現象」(1/16)

今泉 蓮

児童養護施設の狭い玄関の傍らに机のようなものを据(す)えて、その周囲(まわり)に小さい椅子が並べてある。台は清潔に拭かれ塵一つない。台の上には小さなプレゼントの包みが幾つか置かれ、その前で施設長さんが一人出した文房具を眺めている。文房具は伊達直人からのものらしい。

施設長さんは興奮の加減でなかなか赤くなっている。その上顔中つやつやして皺(しわ)と云うほどのものはどこにも見当たらない。ただ黒い髭(ひげ)をありたけ生(は)やしているが意外と若いと云う事だけは分る。施設長さんには子供はいないが、施設にはいつも10人程度いて、それで年よりも老いていると思った。ところへ裏の風呂場から手桶に水を汲んで来た職員さんが、前垂(まえだれ)で手を拭きながら、

「施設長さん、とうとうタイガー・マスクが来たの」と聞いた。施設長さんは頬一杯の笑みを呑み込んで、

「そうらしいよ」と嬉しそうに云った。職員さんは拭いた手を、ズボンのポケットに入れながら横から施設長さんの顔を見て立っていた。施設長さんは手紙のようなものを封筒から不器用にぐいと引き出して、声をだして読みながらふうと長い息を黒い髭の間から吹き出した。すると職員さんが、

「何処の伊達直人さんかね」と聞いた。施設長さんは長い息を途中で切って、

「子供の伊達直人さんだよ」と云った。

職員さんは手をポケットに突込(つっこ)んだまま、

「どう使いましょうかね」とまた聞いた。すると施設長さんが、また別の包みのようなものから文房具をぐいと引き出して前のように嬉しそうな笑みを浮かべて、

「お礼、伝えたいね」と云った。

全国児童養護施設協議会では「全国に温かい気持ちが広がったことが、今回一番大きいことだ」としつつ「自由に使える分、いくらであっても現金の寄付はありがたい」と云う。

しかし、子供達の生活費は国と都道府県が半分ずつ負担するが、食費や生活雑費などを除くと、ほとんど自由に使えるお金は残らないという。更に、施設側は「応援が続いてほしい」と願うが、個人の善意だけでは児童養護施設の問題の抜本的解決にはならない。



< 参照 > 夏目漱石「夢十夜(第四夜)」

### 春秋：「タイガーマスクのプレゼント」(1/11)

50歳前後の男性の中には、胸が熱くなった人もいるのではなからうか。元日の夜、小田原の児童相談所が入居する建物の前に、6つのランドセルが置いてあった。一番上には「お年玉です 伊達直人」との添え書きがついていたという。

高度成長の終盤に一世を風靡したプロレス漫画「タイガーマスク」の主人公の名前である。それをもとにしたアニメを覚えている人の方が、多いかもしれない。ファイトマネーで自らが育った児童養護施設を助け、さらには全国の孤児を助けるために、あえて命がけの過酷な闘いを繰り返していく、という物語だ。

昨年クリスマス、前橋の児童相談所にランドセルが置かれていた。やはり伊達直人の名前が添えられていたが、別人らしい。前橋の件に感銘を受けたという小田原の贈り主は、「タイガーマスク運動が続くとよいですね」と記した。岐阜や長崎などでも同じような出来事が続く。善意は別の善意を呼ぶのだろう。

そういえばワタミの渡辺美樹会長が昨年、テレビで語っていた。貧しかった少年のころ、この漫画の主人公が逆境からはい上がる姿に勇気づけられ、後に自らカンボジアで児童養護施設を設立した、と。原作者の梶原一騎も、絵を担当した辻なおきも、亡くなって久しいが、今なお人々の心を揺さぶり続けている。

### 天声人語：「社会で子を育てる」(1/13)

茨木のり子さんの詩「みずうみ」から引く。「だいたいお母さんてものはさ／しいん／としたとこがなくちゃいけないんだ / 名台詞(めいせりふ)を聴くものかな! / ふりかえると / お下げとお河童(かっぱ)と / 二つのランドセルがゆれてゆく / 落葉の道……」

「ランドセル」の一語が利いている。子どもの成長の道連れである。ランドセルが歩いているような後ろ姿で入学し、やがて負けずに背負えるほどに育つ。詩人を驚かす「名台詞」も口にするようになる。背中の親友は、小さな喜怒哀楽を6年間、黙って見守ってくれる優しい存在だ。

そんな「親友」が10個、前橋市の児童相談所に置かれたのは暮れのクリスマスだった。それを誘い水に、情けの泉がわき出すように、「タイガーマスク」の主人公を名乗る善意が広まっている。

最初の善意への共感が相次ぐのも、「ランドセル」が利いていよう。ぴかぴかのランドセル姿は、子どもが貧と富、幸と不幸で分け隔てされてはならないことの象徴だ。初代タイガーマスク氏の、ささやかだが、志ある一灯だったろう。

市井の善意とは異なるが、山形県庄内町を思い浮かべる。ランドセルを新入生全員に贈り続けていて、今年も187人が新品をもらう。「子どもたちが地域の宝だという思いを、町民みんなで分かち合うのです」は原田真樹町長の弁だ。

一つ一つは小さな善意が、「社会で子を育てる」という脆(もろ)い理念を、確かな意識に高める力になればいい。人みな人の世の子。めぐる春、善意のランドセルをゆらす小さ

な背に幸いあれと願う。

#### 余禄：「善意の連鎖反応」(1/12)

井上ひさしさんは中学生時代、岩手県一関市の本屋で国語辞書を万引きしようとして店番のおばあさんに見つかった。「そういうことをすると、私たちは食べていけなくなるんですよ」。おばあさんは厳しくたしなめ、薪(まき)割りを命じた。

罰だと思って井上さんは薪割りをした。するとおばあさんは国語辞書を渡して言った。「働けば、こうして買えるのよ」。「おばあさんは僕に、まっとうに生きることを教えてくれたんです」。井上さんは「返しても、返しきれない恩義」と振り返っている。

40年以上の歳月の後、大作家となった井上さんは一関で何度もボランティアの文章講座を開く。それを井上さんは「恩送り」と言い表している。誰かから受けた恩を直接返すのではなく、別の人に送る。その人がまた別の人に渡す。恩がぐるぐると世の中を回るのだ。

「井上ひさしと141人の仲間たちの作文教室」(新潮文庫)が記す話である。こう聞けば、米映画「ペイ・フォワード」を思い起こす方もいよう。あれは自分が受けた厚意をその人に返すのでなく、別の3人に回すことを考えついた少年が世界を変える物語だった。

漫画タイガーマスクの主人公・伊達直人を名乗る児童養護施設への贈り物が相次いでいる。孤児だった覆面レスラーが同じ境遇の子供らのためにファイトマネーを投じる - - 40年前の「恩送り」の物語である。それがなぜか今、人々の心を奥深くから揺り動かすのだ。

「恩送り」は江戸時代によく使われた言葉という。人々の間で受け渡される思いやりが増幅して世界を変えていく。初夢に終わらせたくない善意の連鎖反応だ。

夏目漱石「夢十夜」

[http://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/799\\_14972.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/799_14972.html)

< 第四夜 >

広い土間の真中に涼み台のようなものを据（す）えて、その周囲（まわり）に小さい床机（しょうぎ）が並べてある。台は黒光りに光っている。片隅（かたすみ）には四角な膳（ぜん）を前に置いて爺さんが一人で酒を飲んでいる。肴（さかな）は煮しめらしい。

爺さんは酒の加減でなかなか赤くなっている。その上顔中つやつやして皺（しわ）と云うほどのものはどこにも見当らない。ただ白い髭（ひげ）をありたけ生（は）やしているから年寄（としより）と云う事だけはわかる。自分は子供ながら、この爺さんの年はいくつなんだろうと思った。ところへ裏の笥（かけひ）から手桶（ておけ）に水を汲（く）んで来た神（かみ）さんが、前垂（まえだれ）で手を拭きながら、

「御爺さんはいくつかね」と聞いた。爺さんは頬張（ほおば）った煮（に）しめを呑（の）み込んで、

「いくつか忘れたよ」と澄ましていた。神さんは拭いた手を、細い帯の間に挟（はさ）んで横から爺さんの顔を見て立っていた。爺さんは茶碗（ちawan）のような大きなもので酒をぐいと飲んで、そうして、ふうと長い息を白い髭の間から吹き出した。すると神さんが、

「御爺さんの家（うち）はどこかね」と聞いた。爺さんは長い息を途中で切って、

「臍（へそ）の奥だよ」と云った。神さんは手を細い帯の間に突込（つっこ）んだまま、

「どこへ行くかね」とまた聞いた。すると爺さんが、また茶碗のような大きなもので熱い酒をぐいと飲んで前のような息をふうと吹いて、

「あっちへ行くよ」と云った。

「真直（まっすぐ）かい」と神さんが聞いた時、ふうと吹いた息が、障子（しょうじ）を通り越して柳の下を抜けて、河原（かわら）の方へ真直（まっすぐ）に行った。

爺さんが表へ出た。自分も後（あと）から出た。爺さんの腰に小さい瓢箪（ひょうたん）がぶら下がっている。肩から四角な箱を腋（わき）の下へ釣るしている。浅黄（あさぎ）の股引（ももひき）を穿（は）いて、浅黄の袖無（そでな）しを着ている。足袋（たび）だけが黄色い。何だか皮で作った足袋のように見えた。

爺さんが真直に柳の下まで来た。柳の下に子供が三四人いた。爺さんは笑いながら腰から浅黄の手拭（てぬぐい）を出した。それを肝心掬（かんじんより）のように細長く掬（よ）った。そうして地面（じびた）の真中に置いた。それから手拭の周囲（まわり）に、大きな丸い輪を描（か）いた。しまいには肩にかけた箱の中から真鍮（しんちゆう）で製（こし）らえた飴屋（まめや）の笛を出した。

「今にその手拭が蛇になるから、見ておろう。見ておろう」と繰り返して云った。

子供は一生懸命に手拭を見ていた。自分も見ていた。

「見ておろう、見ておろう、好いか」と云いながら爺さんが笛を吹いて、輪の上をぐるぐ

る廻り出した。自分は手拭ばかり見ていた。けれども手拭はっこう動かなかった。

爺さんは笛をびいびい吹いた。そうして輪の上を何遍も廻った。草鞋(わらじ)を爪立(つまだ)てるように、抜足をするように、手拭に遠慮をするように、廻った。怖(こわ)そうにも見えた。面白そうにもあった。

やがて爺さんは笛をぴたりとやめた。そうして、肩に掛けた箱の口を開けて、手拭の首を、ちよいと撮(つま)んで、ぽっと放(ほう)り込(こ)んだ。

「こうしておく、箱の中で蛇になる。今に見せてやる。今に見せてやる」と云いながら、爺さんが真直に歩き出した。柳の下を抜けて、細い路を真直に下りて行った。自分は蛇が見たいから、細い道をどこまでも追(つ)いて行った。爺さんは時々「今になる」と云ったり、「蛇になる」と云ったりして歩いて行く。しまいには、

「今になる、蛇になる、

きつとなる、笛が鳴る、」

と唄(うた)いながら、とうとう河の岸へ出た。橋も舟もないから、ここで休んで箱の中の蛇を見せるだろうと思っていると、爺さんはざぶざぶ河の中へ這入(はい)り出した。始めは膝(ひざ)くらいの深さであったが、だんだん腰から、胸の方まで水に浸(つか)って見えなくなる。それでも爺さんは

「深くなる、夜になる、

真直になる」

と唄いながら、どこまでも真直に歩いて行った。そうして髯(ひげ)も顔も頭も頭巾(ずきん)もまるで見えなくなってしまった。

自分は爺さんが向岸(むこうぎし)へ上がった時に、蛇を見せるだろうと思って、蘆(あし)の鳴る所に立って、たった一人いつまでも待っていた。けれども爺さんは、とうとう上がって来なかった。

### 朝日：「覆面の善意、生かすには？」(1/16)

タイガーマスクの主人公・伊達直人などの名での児童養護施設へ贈り物をする現象が続く中、施設で暮らす子どもたちが何を必要としているのかに関心が集まっている。善意をどう生かし、継続させるか。「応援が続いてほしい」と願う施設側の声を聞いた。

児童養護施設では、虐待などさまざまな事情で親と暮らせない2歳から原則18歳までの子どもが共同生活を送る。県内には20施設あり、そのうち県所管の17施設に約900人が暮らしている。子どもたちの生活費は国と都道府県が半分ずつ負担するが、食費や生活雑費などを除くと、ほとんど自由に使えるお金は残らないという。

今回の贈り物は、きっかけとなったランドセルのほか、商品券、文具、現金などが多い。実際にランドセルは不足しているのか。

子どもたちには生活費のほか、進学で必要なものはある程度まかなえるよう、小学校、中学校入学時に入学支度金として約4万～4万6千円が支給される。ランドセルは通常そのお金で買うか、親が買う場合が多く、不足することはないという。「支度金は対象の児童全員に支給されるので、すでにランドセルが寄付されている場合は、その分のお金を別のことに回すことができる」と県児童家庭課は説明する。「公費で最低限のものはそろえられるから、正直、自由に使えるお金の方がありがたい」と話す児童養護施設の施設長もいる。

千葉市の児童養護施設「ほうゆう・キッズホーム」では先週、相次いでランドセルや商品券などの贈り物が届いた。安齋和夫施設長(68)は「これだけ多くの人が子どもたちを応援してくれている」と感謝する。ただ、現状の厳しさを感じることも多い。

#### 高校生に教育費なし

昨春、同ホームの小学生の男の子に「友達と一緒に地域の少年サッカークラブに入りたい」と頼まれた。だが、数万円の活動費や遠征費を捻出するのは難しく、職員の人手に余裕がなく練習の送り迎えもできないため、断念させた。「現状では子どもの課外活動は難しい。やりたいことをやらせてあげられず、かわいそうなことをした」

部活動費や塾代などにも制約がある。教育費として小学生に約2千円、中学生には約4千円が毎月支給されるが、その金額では塾代などは全て捻出できず、不足分を施設が持ち出すことが多い。また高校生には教育費がないため、全て生活費や施設の運営費から出さなければならない。

また、施設の小規模化も進んでいない。厚労省は家庭的な環境での養育を目指して一施設に子ども10人程度で職員が交代で住み込む小規模化方針を示しているが、改修費用、人員増員が負担となり、多くの施設は大人数で生活する大舎制のままだ。

#### 「お礼、伝えたい」

今後は、贈る側と贈られる側の思いをつなげる必要がある。県には先週以降、寄付を希望する人から「自分も何かしたいのだが、何を贈ったら喜ばれるか」という相談が数件あったという。また、同ホームにランドセルを送ったある男性の手紙には「タイガーマスク運動、最初は軽く考えランドセルを買いました。しかし、用意しているうちに単なる自己満

足に過ぎないのでは?と思い、寄付することを躊躇(ちゅう・ちょ)してしまいました」と書かれていた。

全国児童養護施設協議会副会長で練馬区の児童養護施設、錦華学院の土田秀行施設長(61)は「全国に温かい気持ち広がったことが、今回一番大きいことだ」としつつ「自由に使える分、いくらであっても現金の寄付はありがたい」という。

寄付金は公的機関の場合、県へ「子育て支援策に」と目的を指定して寄付ができ、ふるさと納税として税控除されるほか、民営の児童養護施設でも寄付金控除が受けられる。また土田施設長は「いただいた方にはぜひお礼と、役立っていることを伝え、信頼を結んでいきたい。それをきっかけに児童養護施設をもっと知ってもらえれば」と、伊達直人の実名登場を期待する。

**1月9日**

**<参照> 夏目漱石「夢十夜(第四夜)」**

1月16日